氏名（本籍）	平浜（ひらはま）　あかり（広島県）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 168 号
学位授与年月日	2026 年 3 月 23 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び広島市立大学学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	織りなす祈り　綴織の身体性と視覚効果による祈りの表現
論文審査委員	主　査　教授　野田　睦美 委　員　教授　志水　児王 委　員　准教授　石松　紀子

論文内容の要旨

綴織は、織り組織の中で最も単純な平織を応用して図柄を描く技法ゆえに、世界各地で有史以降織られてきた。名前、幾何文様、動植物や人間の図柄が織り込まれ意味を宿した綴織は、死者とともに埋葬され、教会や城の室内に飾られることで、祈りや祝祭の場を彩る神聖で特別なものであった。綴織は、空間と一体となり場の性格を強調することや、儀礼の場において不可視の祈りや物語を媒介する役割を担ってきた。

綴織が祈りと結びついてきた歴史は長い。現代の作家においても綴織の作品や糸を積み重ねていく制作行為に祈りを見いだす例は少なくない。しかし、従来の研究では作者の祈りという不可視のものが制作過程を通じてどのように綴織として生成されていくのかという問いを追求する視点は十分に扱われてこなかった。

本論文における祈りとは、宗教的信仰や内面に限定されるものではなく、作者や共同体の心理上で変容しつつ生成され、行為や作品を通して具現化しうるものである。以上を踏まえ、本論文は、祈りが綴織を通して形を得ていく様子を、歴史的背景、作例、制作過程における身体性、そして作品に残る視覚的痕跡から考察することを目的とする。

本論文の目的に対し、以下の構成で論じていく。

第１章「祈りの変遷―綴織の歴史から」では、用語を整理し、綴織の歴史に祈りがどのように関係してきたかを観察する。綴織の起源を辿ることは困難であるため、本論での祈りに関係する系譜であるコプト織、ヨーロッパのタピスリー、日本の綴織について述べる。

第２章「祈りをあらわす綴織」では、ドイツの宗教学者フリードリヒ・ハイラーの『祈り』を参照する。ハイラーが祈りを類型化することで導いた「祈りの本質」を綴織や現存する作品３点に照らし合わせ、制作の起点となった作者の情動や共同体にとっての祈りを分析する。３点の作品とは中世ヨーロッパの傑作である《アンジェの黙示録》、核兵器廃絶を訴えたジャン・リュルサの《世界の歌》、原子爆弾による惨状を描いた丸木位里・丸木俊の《原爆の図》である。それぞれ時代や制作目的、表現方法などは異なっているが、いずれも戦争や社会不安を背景とした状況下で制作された綴織である。同時に、いずれも原画の作者と織る人による協業を前提

とし制作された点を踏まえ、完成作の分析だけでは原画から綴織の完成までの制作過程における祈りの変容を捉えきれないことを確認する。

第３章「祈りの可視化」では、綴織の技法を用いた身体性と視覚効果がどのような祈りの表現となるのかについて、筆者の制作過程から考察する。内面の概念である祈りと身体を結びつけるために哲学者の湯浅康夫による『身体論』を参照し、制作を身体と精神の応答が集積する場として捉えるとともに、綴織の技法による視覚効果を解説し、祈りを主題とし表現するための方法を述べる。

第４章「祈りの表現」では、筆者の綴織作品５点の制作過程と完成作品を分析する。５点の作品とは《絲と朝やけ》、《種々の布置》、《鐵の街》、《雲》の連作２点である。綴織は下絵のイメージを糸に置き換え、表現目的に応じた緯糸の折り返し部分を瞬時に判断する行為の蓄積によって形成される。織る人の瞬時の判断による痕跡は何を想起させるのかについて明らかにする。具体的には、《絲と朝やけ》では、一瞬にして命を失った爆心地の犠牲者や、いまだに遺骨が発見されず名前が明らかになっていない人々の魂に触れようとし、反戦と鎮魂の祈りを込めた。《種々の布置》では、旧陸軍広島被服支廠の調査を経て雑草を図案化し、そこで過ごした人々や被爆建物を保護する地域の人々の思いに寄り添った。《鐵の街》では、呉の旧海軍港付近の工場地帯の風景を描き、筆者の記憶と失われる歴史的建造物について制作した。《雲》では、第二次世界大戦後のきのこ雲の象徴性を分析し、雲を、原子爆弾投下を表す記号としてではなく、身近に存在する祈りの象徴として即興性のある方法で織った。結びでは、内容を整理し今後の課題を提示する。以上のように本論文は、祈りを観測不可能な内面の現象として限定せず、作品や制作過程において生成されうるものとして捉え直している。本論文では、綴織の歴史的背景、作例、作者の実践を通して、祈りを観測し表現することを試みた。その結果、綴織は制作過程全体を通じた身体性と糸の重なりによって生じる視覚効果に支えられ、祈りがもつ継続する時間性に結びつくと結論づけた。

論文審査の結果の要旨

本論文等は、申請者の創作活動において主要となる綴織による祈りについて、西洋と東洋の綴織作品と申請者の作品と制作過程を通じてその身体性と視覚効果を踏まえて考察し、綴織で表現する意義と可能性を実証したものである。

第１章「祈りの変遷-綴織の歴史から」ではーロッパ中世美術織物史の原点とされるコプト織からタピスリの隆盛を経て日本の代表的な美術織物までを取り上げ、綴織おける祈りの変遷について述べる。第２章「祈りをあらわす綴織」ではフリードリヒ・ハイラーが導いた祈りの本質をもとに、タピスリーの最高優品とされる《アンジェの黙示録》、ヨーロッパの現代タピスリー作家の第一人者であるジャン・リュルサの《世界の歌》、戦争による被害を描いた丸木位里・丸木俊の《原爆の図》を検証する。第３章「祈りの可視化」では申請者の制作過程における身体性と綴織の技術的な特徴による視覚効果を分析し、祈りの表現となる根拠を明らかにする。第４章「祈りの表現」では原子爆弾投下をテーマとした申請者の作品《絲と朝やけ》、《種々の布置》、《鐵の街》、《雲》を解説し、制作過程のなかで繰り返される一連の行為がどのように祈りとして昇華されていくか実証する。

申請者は人にとって普遍的な精神的活動である祈りについて、綴織による客観的理解の方法を検証し、論文と実作品 8 点と制作過程の映像によって実証した。そして綴織特有の制作過程で祈りが生成され、鑑賞者も実感できることで現代社会に応答していくとの結論に達した。本論文等は綴織による祈りの表現の重要性を示し、新しい可能性が認められる。以上により、審査委員会は博士学位審査を合格と判定した。